様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月２７日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：18401012
研究課題名（和文）　仏教・ヒンドゥー教の東南アジア伝播と王権思想
ー叙事詩と法典の受容と変容を中心にー
研究課題名（英文）　Expansion of Buddhism and Hinduism toward Southeast Asia and the Problem of Kingship: with special reference to the epics and the classical codes

研究代表者
山下　博司（YAMASHITA HIROSHI）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：20230427

研究成果の概要（和文）：
東南アジア(特にタイとインドネシア)へのインド系宗教の伝播につき文献収集し諸遺跡を実地調査した。特に東ジャワの大規模遺跡と王権・墓廟との関係で新知見を得た。現代東南アジアにおけるインド系宗教と王権との関わりにつき、王制を維持するタイで現存バラモン儀礼を調査し統治との関係を考究した。タイ版ラーマーヤナ劇の伝統維持についても王国を挙げての保護の様子を取材した。司祭養成の現状を調べるため南インドを実地調査し大きな示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：
This study is an endeavour aiming at a research encompassing various disciplines such as philosophy, anthropology, art history, and religious studies. The focus of the project is the spread of Buddhism/Hinduism toward Southeast Asia with the accompaniment of the authority of Indian Epics or Dharmasastras. In this project I concentrated upon the religio-cultural impacts of India on the formation of dynastic traditions in Southeast Asia where different spiritual traditions like Buddhism, Hinduism, Taoism, Christianity, Islam and other religions have been coexisted side by side without fatal rivalry.

My attention was duly paid in particular to (1) the Majapahit archaeological sites of Buddhism/Hinduism of pre-Islamic era found throughout East Java Province, (2) the Ramakien, the Thai counterpart of the Indian Ramayana, and its royal patronage as observed at the educational institutions of the Ministry of Culture, Kingdom of Thailand, and (3) the religious elements of Indian origin in present-day Southeast Asia and their transformation under globalization and international tourism.

I have so far produced publications including a book of my single authorship related to the above topic. In those works I presented new perspectives to view Indian religious tradition, that of epics in particular, which exercised grave influence historically upon the formation of religious cultures and political authorities in this region.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2007 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
総　計	6,600,000	1,980,000	8,580,000

研究分野：インド思想史・宗教史、南アジア・東南アジア交流史、地域研究
科研費の分科・細目：印度哲学・仏教学
キーワード：宗教、伝播、仏教、ヒンドゥー教、叙事詩、王権、インド、東南アジア

１．研究開始当初の背景

本研究プロジェクトは 2002～2005 年度の基盤研究（B）「南インドのラーマーヤナ伝承と東南アジアへの伝播についての文献学的及び民俗学的調査」（研究代表者：山下博司）の後継プロジェクトとしての位置づけを有している。

先行プロジェクトは、従来のような南アジア・古典世界の文献学的研究にとどまらず、古代から中世にかけて南アジアから東南アジア世界に伝播し普及した仏教やヒンドゥー教をとりあげ、従来のインド学研究の手法に総合的・網羅的な観点も加えて大きく展開を図ったものである。多元社会としての東南アジア世界に目を向け、そこに息づく仏教、ヒンドゥー教の伝統と、道教、キリスト教、イスラームとの関わりを念頭に入れながら、インド的宗教の意義と役割を歴史的文脈および現代的文脈から調査し考察した。現地調査と資料収集により、タイ仏教と国際ツーリズムの問題、タイの国家仏教におけるインド系叙事詩、とくにラーマキエン(ラーマーヤナ)の機能、ミャンマーにおけるインド系叙事詩の伝承、インドネシア・ジャワ等中部と東部におけるインド系叙事詩の伝承形態、バリ島におけるヒンドゥー叙事詩と国際ツーリズムによる伝統の変容などをめぐり、顕著な成果を得、著書や学術論文のかたちに結実している。

さらに、上述の文脈を踏まえ、東南アジアのインド系移民社会におけるヒンドゥー教的伝統、とくに叙事詩的伝統の維持と変容についても調査をおこなった。インドネシア・ジャワ島東部に点在する仏教とヒンドゥー教の遺跡群をめぐるインド系の宗教伝承に関する調査については、先行プロジェクトでは予備的な段階にとどまっており、次なるプロジェクトによって深化される必要がある。

本研究計画は以上のような背景と達成とを踏まえて計画・立案された。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の 5 点ほどに要約される。

(1)東南アジア諸王朝における仏教・ヒンドゥー教の導入の経緯と推移、及び現状を調べ、それらを比較・綜合して問題点を析出する。

(2)東南アジア諸王朝の権力基盤の確立に伴う外来のインド的諸要素について検証する。特に重要な二大叙事詩と法典類の伝播・普及という視点から、王権の維持と強化に果たした役割を歴史的に跡づけ、東南アジア世界におけるインド的宗教の政治性について討究する。

(3)東南アジアへの伝播と浸透に伴うインド的文化要素の変容の問題をインド叙事詩等に着目して集中的に考察する。

(4)さらに現代東南アジア世界における外来的文化要素を、インド系と中国系の宗教要素に着目して存在の様態と相互関係を調べ、東南アジア宗教文化のダイナミズムにも論及する。

(5)以上の諸作業の成果を踏まえ、文化史的・思想史的文脈から仏教・ヒンドゥー教の東南アジア世界における歴史的意義を再検討し、古代から現代にわたるインド宗教文化の東方への伝播・拡大について学界に新しい知識・知見・視点を提供する。

３．研究の方法

文献研究による知見とそこから導かれる概念枠組によるだけでは歴史社会における宗教の伝播の問題を十分に解明することは困難である。本研究計画の立案の基本的スタンスもこの点にある。

フィロロジカルな方法にフィールドワークによる現地調査の成果を加えることで、文献による欠を補うだけでなく、文献研究と現地調査の間に相互補完的な位置づけを与え、到達した知見を補強していく。

そのために、儀礼等については可能な限り映像資料（ないし少なくとも写真資料）の形に収め、シークエンスを視覚的・音響的にデジタル媒体に記録して客観的な分析に耐える資料として蓄積していくことも行う。

４．研究成果

(1)東南アジア諸王朝における仏教・ヒンドゥー教遺跡について、タイとインドネシアを中心に訪れ、インド系宗教の遺物の位置や建築様式を丹念に調べ、スティル写真とビデオ媒体に収めた。併せて導入の経緯と推移を明らかにし、それらを政治史的観点から比較・綜合して問題点を析出する作業を行った。東南アジア諸王朝の権力基盤の確立に伴う外来のインド的諸要素について検証するための予備段階と位置づけ、基本資料を収集した。インドネシアでの調査にあたっては、シンガポールを拠点とし、シンガポール国立図書館（NLB）を利用して所蔵資料を閲覧・複写等

の便宜を得た。

東ジャワ州の山麓の保養地トラワス村からモジョコルト市付近のトゥウォウラン地区にかけて点在するモジョポヒト王国の仏教・ヒンドゥー教遺跡を数次にわたり踏査して写真資料として蓄積するとともに、遺跡分布の地理的・歴史的概要を把握し得た。

このように、イスラーム化以前のジャワの宗教事情について、インドとの関わりという視点から実際の遺跡等に即して事実関係を整理することができた。

インドネシアでの遺跡調査と並行して、ムラユ（マレー）世界、すなわちインドネシアやマレーシアの文化理解に必須なインドネシア語の習得に努め、本学在籍のネイティヴ・スピーカーから定期的に初等～中等文法及び会話の手ほどきを受け、研究の深化に必要な言語的な知識を得ることができた。インドネシアでの調査にも有益であった。

調査からの帰国後は、補助者の助けを仰ぎつつ、収集した文献資料および映像資料の整理・分類を進め、将来のデータベース化に備えて利用しやすい環境整備と加工作業を行うとともに、インド系の法典類と叙事詩文学を解釈・分析し、インドの文化複合が東南アジアへ伝播し、定着する過程で被った文化変容の諸相とその意義とを考察する作業を深めていった。

(2)東南アジア多民族社会におけるインド系宗教の展開と意義について、華人に伝わる九皇大帝の慶典を調査してきているが、マレーシア・ペナンの最古の斗母宮(香港巷斗母宮)とその九皇爺崇拝の事例を取り上げ、開始から数日間の儀礼シークエンスを映像に収めるとともに、関連の文献資料や研究論文を集めることができた。その様子は英文の中国語の地元日刊紙複数に取り上げられ、所属部局の HP にも梗概が紹介されている。

この調査によって、東南アジアに伝播・維持されている道教系の儀礼とインド系の儀礼の異同と融合とを確認し得た。ジャワおよびマレーでの調査については、中継地点であるシンガポールに立ち寄り、シンガポール国立図書館の所蔵資料を用いて下調べを行い、書誌的に有効な情報を得ることができた。

(3)このように東南アジア諸王朝の権力基盤の確立に伴う外来のインド的諸要素について現地調査をもとに進捗させたが、それと同時に、東南アジアへの伝播と浸透に伴うインド的文化要素の変容の問題についての考察を進展させた。具体的には、インドネシアの東ジャワ州・ブロモ山中に暮らすヒンドゥー系の部族民トゥングル人によるヒンドゥー教儀礼ウパチャラ・カソド(カソド儀礼)を 9 月の満月の日(カソド月)に現地で調査し、映像に収め得たことは収穫であった。これまで日本人研究者による研究がほとんど無かっただけに、重要な意義のあることと考える。この儀礼については近日中の成果発表を期している。

(4)タイの首都バンコクと南部のナコン・シー・タンマラートにおけるバラモン教関連施設（寺院など）を訪れて現代のタイ化したバラモン教と司祭の様子を調べ、特に首都において 700 年前のスコータイ朝に由来し現ラッタナコーシン朝の王室儀礼として定着している農耕祭（プートモンコン）のシークエンスを映像に収めるとともに、現国王の在位 60 周年記念式典（2007 年）とローヤル・バージを観察してビデオ映像に記録した。さらに、首都のバラモン寺院で行われる恒例の新年儀礼のシークエンスも数日にわたりカバーした。

また、バンコク市のタイ文化省設立の演劇芸能大学校のカモン・スウト院長の知遇を得て、インド系叙事詩「ラーマキエン」の伝承と伝統維持について教程も含め詳細に調査することができた。近代国家であるタイ王国が政府を挙げて「タイ版ラーマーヤナ」に関わるパフォーミングアーツの維持と普及に努めていることは示唆的である。この研究課題については、2010 年度にさらなる深化を期している。

(5)インドのヒンドゥー司祭がグローバリゼーションに乗って東南アジアを中心に進出している事実に鑑み、南インド系のヒンドゥー教司祭たちのルーツを調べるため、司祭を多く送り出しているパータ・シャーラー（学院）のあるインド・タミルナードゥ州のピッライヤールパッティを訪れ、学校の調査と面接調査を行った。

(6)宗教多元的な近現代のアジアにおけるインド的要素と他宗教との関わり合いや共存関係を調べるため、調査時にトランジット的に立ち寄ることになったシンガポールの信仰現場で、宗教関係者などにインタビューし、統治の関係からの異宗教間融和の問題について、ファーストハンドの知見を得ることができた。

(7)本研究計画語を見据えた課題として、いくつかの問題が浮かび上がった。一つは法典そのものを考究する場合のテクニカルな問題である。法典類の検証については現地語の知識が不十分であったことから困難があり、成果が手薄なものになってしまったことは否めない。また現地調査においても東南アジア（特にインドシナ）において英語が役に立たないことも多く、とりわけタイ語の習得が不可欠であることが実感された。2010 年以降にタイ語の習得を期し、さらなる研究の深化に備えたい。

二つ目は、研究内容が「収束」というより「拡散」する傾向を帯びてしまったことであ

る。それだけ多くの問題を内包する研究課題だったことに間違いはないが、今後は問題点を短期的スパンで絞り込み、より集中的かつピンポイントで研究課題の処理に当たりたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）
１．山下博司、シンガポールの国民統合と宗教間対話、宗教研究、査読無、83 巻(4 輯)、2010、509-510 頁
２．山下博司・岡光信子、シンガポールの宗教政策と民族融和―宗教間関係と宗教協和宣言の成立を中心に―、東方、査読有、25 号、2010、180-200 頁
３．山下博司・岡光信子、現代タイにおける伝統舞台劇『ラーマキエン』と文化行政－バンコクとナコーン・シー・タンマラートの文化省教育機関での調査をもとに、東方、査読有、24 号、2009、161-173 頁
４．山下博司、ヒンドゥー司祭の世界進出と養成システムの変容、宗教研究、査読無、81 巻(4 輯)、2008、307-309 頁
５．山下博司、「アジア共通の宗教文化としての仏教とその世界的展開について」のコメント、次世代に残すアジアの文化と技術Ⅱ（東北大学大学院国際文化研究科）、査読無、2008、40-44 頁
６．山下博司・岡光信子、村邑からディアスポラへ－南インド・チェッティナードゥにおけるナガラッタールとヒンドゥー司祭養成学校の調査から、東方、査読有、22 号、2007、128-143 頁
７．山下博司、東南アジア華人社会と伝統宗教－シンガポール道教寺廟の一事例、宗教研究、査読無、80 巻(4 輯)、2007、400-402 頁
８．山下博司、〈ヨーガ〉と〈ヨガ〉の狭間で－ヨーガのグローバル化とその現代的意義を考える、次世代に残すアジアの文化と技術Ⅰ（東北大学大学院国際文化研究科）、査読無、2007、19-36 頁

〔学会発表〕（計７件）
１．山下博司、シンガポールの宗教多元性と宗教間融和、「インド宗教思想の多元的共存と寛容思想の解明」研究会、2009 年 5 年 31 日、学士会館
２．山下博司、シンガポールのヒンドゥー寺院と儀礼空間－東南アジアのインド・ディアスポラにおける寺院儀礼と寺院司祭の問題、「インドにおける宗教的空間の象徴性に関する学際的研究」研究会、2009 年 2 月 14 日、金沢市四校記念文化交流館
３．山下博司、シンガポールの国民統合と宗教間対話、日本宗教学会、2008 年 9 月 12 日、京都大学
４．山下博司（コメンテーター）、ランジャナ・ムコーパディヤーヤ「アジア共通の宗教文化としての仏教とその世界的展開について」へのコメント、国際文化研究科シンポジウム「次世代に残すアジアの文化と技術Ⅱ」、2008 年 3 月 1 日、東北大学
５．山下博司、ヒンドゥー司祭の世界進出と養成システムの変容、日本宗教学会、2007 年 9 月 17 日、立正大学
６．山下博司（パネリスト）、ヨーガとヨガの狭間で―ヨーガのグローバル化とその現代的意義を考える、日本国際文化学会シンポジウム「次世代に残すアジアの文化と技術Ⅰ」、2007 年 6 月 26 日、東北大学
７．山下博司、東南アジア華人社会と伝統宗教－シンガポール道教寺廟の一事例、日本宗教学会、2006 年 7 月 1 日、東北大学

〔図書〕（計３件）
１．山下博司、ヨーガの思想(選書メチエ 432)、講談社、2009、全 246 頁
２．山下博司、バクティ信仰の展開、辛島昇編『世界歴史大系・南アジア史 3』所収、山川出版社、2007、108-113 頁
３．山下博司・岡光信子、インドを知る事典、東京堂出版、2007、xiv+414 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
山下　博司（YAMASHITA HIROSHI）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：20230427
(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：